

概要報告

第7回 AP-BON 会議

アジア太平洋地域には、生物多様性のホットスポットとして、世界における絶滅危惧種の約3分の1が生育・生息しているものの、生物多様性の保全は十分ではない。そのため、利用可能な情報を統合し、生物多様性の保全及び政策決定におけるデータ共有・活用を促進する協同パートナーシップが求められている。AP-BON は、生物多様性に関するネットワーク活動を推進するとともに、国、地域、地球規模における生物多様性の保全に相乗効果をもたらすものである。

第7回 AP-BON 会議を第2回 ASEAN 生物多様性会議の特別セッションとして開催し、データ共有を推進する方策等について議論する。

日程：平成28年2月19日（金）～20日（土）

場所：タイ・バンコク

① セントラグラウンド&バンコク・コンベンションセンター 22階

ロータススイーツ9（2月19日）

② セントラウォーターゲート・パピリオンホテル・バンコク 9階

グラウンドパピリオン（2月20日）

参加者：11か国から27名

（1）目的

- ・ 国、地域ごとの生物多様性に関する研究及び評価活動の発表
- ・ IPBESにおける地域及び地球規模の生物多様性アセスメントの成果
- ・ アジア太平洋地域における生物多様性の動向に関する最新情報
- ・ レッドリスト、データ及び論文等を含めたAP-BONの成果に関する評価・更新
- ・ データ共有に関する整理事項
- ・ AP-BONの管理運営

（2）期待される成果

- ・ アジア太平洋地域における生物多様性の主な動向
- ・ 「AP-BON Book 4」に関する提案及び執筆事項
- ・ AP-BON 成果物に関する協力体制
- ・ データ共有及び AP-BON 管理運営に関する合意

(3) 議事概要

本会議の開催に際し、環境省生物多様性センター及び AP-BON 共同議長が挨拶を行った後、アジア太平洋地域における生物多様性の主な動向等について、各国の専門家により発表及び議論がなされた。発表及び議論内容の概要は以下のとおり。

2月19日<1日目>

1. AP-BON の紹介

Dr. Eun-Shik Kim (Kookmin University, Korea)

AP-BONは、ASEAN地域においてさらに活動範囲を広げていくべきであるとし、近年の進展をととも、国別BONの設立やGEO BONへの貢献等に関する課題を説明。IPBES地域アセスメントやGEOSSの新戦略計画が始まり、S9プロジェクトが終了するなど、AP-BONは重要なターニングポイントを迎えている。その他、AP-BONの発展には国別BONの強化が必須であるとし、一例として韓国におけるKBONの活動を紹介した。

2. タイにおける生物多様性の調査について

Dr. Dokrak Marod (Kasetsart University)

矢原 徹一 氏 (九州大学)

タイの異なる標高における複数の国立公園で実施した植物調査について紹介。現地では5,375点もの標本を採取し、DNA解析を用いて種を同定した結果、標高が高くなるほど種数が増える傾向にあった。各標本の画像イメージはシェアが可能であり、画像集も作成する予定。その他、タイにおける若手研究者を対象とした分類学研修や、政府が推進するIPBES等への参画についても紹介。

(議論内容)

分類学研修の重要性が認識されるとともに、ESABIIとの連携が提案された。また、AP-BONが国別の各種取組みを統合するプラットフォームとなり、GBIFやIPBES等へ貢献していくことが再確認された。

3. マレーシアにおける生物多様性

Dr. Faridah-Hanum Ibrahim (University Putra Malaysia)

14タイプの熱帯雨林や2.4万haの泥炭地を有しているなど、マレーシアの生物多様性はほぼ全土に渡って豊富であるが、開発や生物資源の乱獲、異常気象などの各種要因によって多くの生物多様性が損なわれているのが現状。保護区の設定、野生動物のリハビリテーション、モニタリング、普及啓発等の保全施策を実施している。

(議論内容)

マレーシアにおいて、行政の生物多様性保全に関する認識が不十分であること、FRIMがモニタリングを実施しているがデータベースの統合は進んでいないことなどが報告された。その他、各国においてモニタリング対象が明確となっていないことが指摘され、モニタリングには標準化と継続性が重要であるとの意見があった。

4. IPBES地球規模アセスメントの進捗

矢原 徹一 氏 (九州大学)

白山 義久 氏 (海洋研究開発機構)

AP-BONはIPBESの地域アセスメントの第3章に対して貢献しうる。地域の生物多様性概況を効果的に集約・図化することが求められているところ、AP-BON Book4の編纂が非常に意義の深いものとなってくる。また、2016年2月から2019年前期にかけて実施されるIPBESの地球規模アセスメントについて、現在の進捗状況及び内容について紹介があり、アセスメントの結果はGB05のベースになるだろうとの説明があった。

5. S9プロジェクトの成果

矢原 徹一 氏 (九州大学)

石井 励一郎 氏 (総合地球環境学研究所)

白山 義久 氏 (海洋研究開発機構)

S9プロジェクトの結果、フィリピンやベトナムを除く東南アジアの各国において森林率の減少が進んでおり、木材生産量、農地の拡大、人工密度と相関関係にあることが明らかとなった。また、維管束植物の種数はマレーシア・サラワク州において最も高いことが確認された。生態系サービスのアセスメントでは、日本の土地利用と蜂蜜生産量との関係について複数のシナリオを検討するとともに、衛星データから東南アジアの森林変化を調査した。その他、淡水魚における生物多様性の変化要因の解析や、重要海域 (EBSA) の基準を用いた海域調査も実施した。

(議論内容)

森林の評価については、データ等によって異なることが指摘され、評価すべき森林タイプはIPBES地域アセスメント執筆者の間でも議論されているところである。また、植林と自然林は全く性質が異なるため、分けて評価すべきとの意見があった。

6. Bon in a BOX

Dr. Jorg Freyhof (GEO BON)

BONには、テーマ別BON、国別BON、地域別BONの3つのタイプが存在している。生物多

様性は国単位で観測される場合がほとんどだが、国ごとの生物多様性が多少異なるとしても他国で応用可能な方法論があると考える。それらに関する情報交換をBon in a BOXは推進している。

7. ディスカッション:アジア太平洋地域における生物多様性の主な動向及びIPBES地域アセスメントへの貢献

(議論内容)

ACBが編集したASEAN概況2は、生物多様性データを統合した好例である。科学と社会科学とのリンクが求められており、AP-BON Book 4にも社会学者から協力を得ることが必要。また、IUCNレッドリストに対する貢献も記述すべきとの意見があった。

2月20日<2日目>

8. AP-BON Book 4「アジア太平洋地域における生物多様性の状況及び動向」の案

AP-BON Book 4の目的として、IPBES地域アセスメントへの貢献、新たな情報・知見の整理・共有、事例紹介等が挙げられ、構成案としては、種・生態系の現状、人と自然の相互作用、データ共有の取組等が示された。

(議論内容)

AP-BON Book 4の内容に加えるべき事項として、生物多様性にかかる危機の相互関係、各国の協力による解決策、関連する出版物、伝統的知識と科学の関係、生物多様性の複雑英性に関する観点等が提案された。

9. 台湾における生物多様性観測

Dr. Yu Huang Wang (TaiBIF)

台湾では、固定カメラや録音装置を用いて、生態系の音声モニタリングを実施している。音声の時系列変化を捉えることを目的としており、最新の情報科学を用いて、音声と動物種とを整理したデータベースを作成している。今後は共有のプラットフォームを構築し、他機関とも連携していきたい。

10. ディスカッション:データの共有

Dr. Yu Huang Wang (TaiBIF)

TaiBIFではGBIFのアジア生物多様性情報基金(BIFA)を受けてデータ公開のための研修を実施する予定であり、GBIFの総合公開ツールキット(IPT)やデータ公開のメリット等について学習する機会となる。

(議論内容)

GBIFのデータにはデジタルオブジェクト識別子 (DOI) が付与され、データが使用機会の多いデータにはより多くの引用がリンク付けられるため、データ公開のインセンティブとなる。その他、研究者はデータ公開に先立つデータ整理に手が回らないという意見があり、また、共有すべきデータとしては、生物多様性重要地域 (KBA) 、生物多様性必須観測要素 (EBV) 、レッドリスト等が挙げられた。